基礎力向上の取り組みについて

３年次会　　吉備豊　工藤泰三　塗田佳枝　本弓康之
進路指導部　阪本康之

平成19年度から、進路指導部が学力到達目標を設定し16歳までの学びを確認するConfirm16（略称C16）の取り組みを行っている。この取り組みの最初の学年である１４期生はこの取り組みに対し意欲が低下することなく、生徒全員がこのC16学力到達目標を達成することができた。これは、C16の目標設定が生徒にとってわかりやすい基準であったことと、生徒・教員・保護者がこの取り組みの重要性を理解したことが大きいと考えられる。

キーワード：　基礎力向上　Ｃ１６　あしなな

１．はじめに

平成１９年度から「１６歳までに学習してきた事の確認をすることにより、本校で学ぶための基礎力やキャリア（進路）選択の基礎となる常識を確認し基礎力のついていない生徒にその育成を促すこと」を目的に、１６歳までの学びを確認するConfirm16(略称C16)を実施している。この取り組みでは、生徒に最低限出来て欲しいと思う学力到達目標を本校の進路指導部が以下のように設定している。

本校では、生徒全員が高校卒業するまでにこの目標を達成するべく、年次・教科・アシスト７（通称：あしなな）で取り組んでいる。

●Ｃ１６認定基準

中学校までや高１の内容

国語：日本漢字能力検定３級

英語：実用英語技能検定３級

または、ＢＡＣＥ５割程度：英語運用能力評価協会「英語運用能力基礎テスト」）

数学：実用数学技能検定３級

または、埼玉県標準テスト６０点

この基礎力向上の取り組みであるＣ１６を最初に実施した１４期生の取り組みとその結果について報告する。

２．１４期生に対する取り組み

１４期生は入学直後から生徒全員がＣ１６の基準を達成することを目標に３年間継続して学年団として取り組んできた。特に、Ｃ１６への生徒の意識を高めるために、進路指導部と連携しＣ１６合格者には学年集会等で認定式を行い表彰する取り組みを行った。保護者に対しても、保護者会等でＣ１６について説明を行い、さらに学期ごとに生徒個人のＣ１６達成状況を伝える文書を作り、保護者の理解と協力を求めた。これらの担任団の取り組みにより、「Ｃ１６は卒業までに絶対に合格しなければならない」と生徒自身が強く意識するようになり、また、学年全体としても強く意識するようになった。

１年次での「あしなな」の取り組みでは、Ｃ１６を意識した授業展開を各担当者が行い、生徒の基礎力向上に努めた。この1年次での取り組みでは、月・金の7時限目と生徒の学習意欲の低下する時間帯に「あしなな」を実施したが、生徒がまだ持っていない検定を意識した「あしなな」クラス編成とそのクラスにあわせた授業展開を実施することで、生徒の高い学習意欲と満足度を維持することができた。また、各学期に実施した評価テストにおいて生徒の学力の向上が確認できた。

３．Ｃ１６の合格者数について

英語検定・漢字検定・数学検定（Ｃ１６基準以上）の合格者数は、図１のような結果となった。

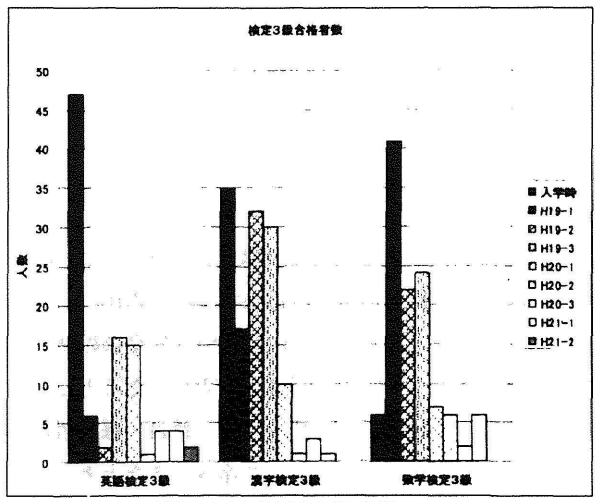

図１　検定3級合格者数

図１によると、英語検定３級・漢字検定３級は高校入学以前に取得している生徒が多く、また、各検定３級合格者数は１年次から２年次前半にかけて増えている。これは、１年次「あしなな」の取り組みの成果であると考えられる。

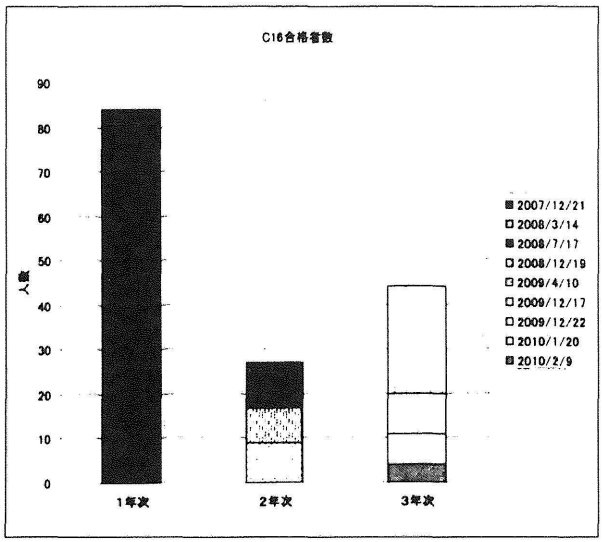

図２　Ｃ１６合格者数

Ｃ１６の合格者数は図２に示すように1年次において約半数の生徒が合格し、2年次・3年次では途切れることなく少しずつ合格している。これは、生徒がＣ１６に対する意識を持ち続け、Ｃ１６を卒業までに合格するという意思を生徒全員が共有していたことが大きいと考えられる。

４．おわりに

本校の基礎力向上の取り組みとして、進路指導部が学力到達目標（Ｃ１６）を設定し、生徒全員が卒業までにその課題に合格することを目標にしている。

このＣ１６に最初に取り組んだ学年である１４期生は、この取り組みが生徒にとって高校の成績とは関係のない目標であったにもかかわらず、１４期生全員（生徒・教員も含む）がＣ１６に対する意識を強く持ち、高校卒業までに１４期生生徒全員がこの基準を達成することができた。

これは、Ｃ１６の学力到達目標が英語検定3級・漢字検定３級・数学検定３級程度と中学校以来生徒にとってなじみのある検定でその検定内容が中学校卒業程度であり学力到達目標として生徒が考えやすかったことと、さらに、この取り組みの重要性を生徒・教員・保護者が十分に理解し共有したことによって達成できたと考えられる。

【引用文献・参考文献】

1. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第45集（2007）「基礎力向上への取り組み」